

# 影にのぞむ ——丸木美術館の個展を終えて

私が原爆の丸木美術館に出会ったのは、中学3年生の時だった。通っていた都内の私立中学校が平和教育に力を入れており、課外授業として訪れた。丁度その年の夏休みの宿題で、身近な人に戦争体験を聞くという課題が出て、母方の祖母に戦争体験を聞いた後だった。祖母は広島原爆の被爆者だった。

私の母は広島で生まれ、育った。私自身は東京の育ちだが、母が里帰り出産をしたため、生まれだけ広島である。母方の祖父と祖母、そして祖母の父母、即ち私からすると曾祖父と曾祖母が広島で被爆した。広島市昭和町、直線距離で爆心地から1.5kmほどのところにあった自宅で、4人とも被爆した。たまたま全員家の中におり生き延びたが、家は全壊し、命からがら逃げた。祖父は当時22歳で広島文理科大学の学生、祖母は21歳だった。似島の野戦病院に収容され、避難生活を送った。被爆の経験は辛く苦しいものだったのだろう。祖父母が自らその体験を話してくれることは無かった。私が中3の時の、その宿題の時に初めて、祖母が被爆体験を話してくれた。全身火傷で皮膚が垂れ下がり、幽霊のように手を前に掲げながらぞろぞろ歩く人たちのこと。助けてと言われたけど助けられなかったこと。その内容の凄惨さもさることながら、泣きながら話す祖母の姿に衝撃を受けた。私は悩んだ末、結局その宿題を提出しなかった。受け止めきれず、何を書いてもその惨状を表すことができていないように思われた。そんな中で見た原爆の図は、ある意味で私にとっては希望だったのだと思う。圧倒的なその表現に打ちのめされ、いつか、どんな形になるかわからない、どんな表現手法になるかもわからないけれど、祖母に聞いたこの原爆の惨状を表現しよう、形に残そう、と心に誓った。

それから25年経ち、40歳になった今年、ようやくその時が来た。しかも、その誓いの場となった丸木美術館で展示の機会を頂けた。

今回の展示で発表した作品は、来場者が原爆の図を観た後に私の作品を観る想定で制作した。原爆の図にぶつかるような表現ではなく、原爆の図を観て感じたことを反芻できるような、静謐な空間にしたいと思った。日本被団協を始めとした被爆者団体の協力を得ながら、広島原爆の被爆者の方15名にお会いし、被爆証言を聞きつつ両手の型取りをさせていただいた。戦後78年経ち、被爆者の方々が年々減っていく中、今このタイミングで被爆者の方の痕跡を残す必要性を感じたからだ。

奇しくも、今年の8月5日は祖母の17回忌であった。原爆の日の前日である。私が中3の時に祖母から話を聞き、そして原爆の図を見た後の3月、祖父が急逝した。それにショックを受けた祖母はそこから重い鬱病になり、碌に話をすることもできなくなった。10年間の鬱の闘病生活ののち、末期の癌が見つかり亡くなった。鬱の祖母と向き合えなかったことが、私の人生の中ではずっと大きなしこりになっていた。それは母も同じ、いやそれ以上だったはずだ。祖父母は被爆時、まだ結婚していなかった。あくまで学生と、その下宿先という関係性だったのだが、被爆し、一緒に逃げ支え合ったことで家族としての絆が生まれ、結婚に至った。そんな経緯を思うと、鬱病だった10年間でずっと、原爆のことを考えなかったことはないだろうと思うのである。私にとって、原爆に向き合うことは、祖父母に向き合うことでもあった。

母は、私に広島の話をしたことは殆ど無かった。原爆の話も聞いたことはない。そんな中、私が丸木美術館で展示をすることになった話をしたら、ぼつりと「私こそ、原爆に向き合わなくてはいけないのよね」と言った。そんな母が、去る8月5日に、生まれて初めて周りの人に、祖父母の被爆体験を語ったそうだ。被爆者の方が高齢化し、被爆証言を語れる人が減っていく中で、被爆二世である母が一步を踏み出してくれたことが、何より嬉しかった。母は今も、原爆に向き合っている最中だと思う。それは私も同じである。

(初出 2023年10月15日 原爆の図丸木美術館ニュース 第155号)